平和への道のり

長久手中学校一年　加藤　優希

今でも七十三年前の八月六日に広島へ原爆がおとされた事を信じられません。なぜなら、今の広島は、とてもきれいで戦争があったとは思えないし、戦争で悲惨な状況があったという現実を想像することが難しいからです。

平和記念資料館で最初に見た展示は、原爆投下前のにぎやかな町でした。しかし、ほんの一瞬で約十四万人ほどの命を奪った事に信じられず、恐怖がおそってきました。

戦争を体験したアサノさんは、八月六日から二ヶ月がたっていない広島へ入ってしまったため、残っていた放射線を浴びて被爆してしまいました。広島の道を歩いていたアサノさんが見たのは、むごたらしい惨状で、その話を聞いた私は手が震え、正直、耳をふさぎたくなりました。人間は恐い。一瞬でたくさんの大切な命を奪ってしまうという話でした。

また、私は被爆者の方が書いた詩が一つ、

20 × 20

心に残っています。それは、泥やチリ、ススなどが空気中の水分と混ざって黒い雨が降った時、あつくて仕方がないから汚なくても水が欲しい、と空に向って大きな口を開けたという詩です。どれほどつらかったのかジンジン伝わってきました。

資料館や原爆ドームには、後世へ二度と戦争が起らないように、原子爆弾は日本が最初で最後の被爆地になって欲しいという被爆した方々の願いが伝わってきました。

今回、広島で学んだ事を自分の言葉として色々な人へ伝えていき、二度と戦争のない明るい時代へ、日本から世界につなげていきたいと思いました。

20 × 20